歌姫の奇跡

春宮七李

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
歌姫の奇跡

【Ｎコード】
Ｎ６５３７Ｕ

【作者名】
春宮七李

【あらすじ】
漫画大好き！な高校生がまさかのトリップ！？
しかも行き着いた先は大好きなあの漫画！

開幕直前

――――空を見上げれば満天の星
その刹那　あなたを思い出す

夜の公園に歌声が響く。
聞くもの全てを魅了してしまうほどの美しい声。
その主は一人の少女。

少女の名前は彼方ハル。
この七曜町の高校に通う普通の一年生。
人と違うところをあげるとすれば、
真っ赤に燃え上がるような瞳。
その瞳のせいで、小学校、中学校ともいじめに遭ってきた。
高校に入ってからはカラーコンタクトで隠すようにしているのだが。

そんな彼女がなぜ真夜中の公園で歌っているのか。
聞けば彼女はすぐ答えるだろう。

おもしろいから、と。

開幕直前（後書き）

読んでくださって有難うございます！
小説を考えたりするのは初めてなので、上手くできなかった・・・・・・・（泣

そんなダメダメなでもＯＫ！と言ってくださる方、
本当に有難うございます！

これからもどうぞよろしくお願いします。

日常

七曜学園

ハルが通っている学園。
小等部、中等部、高等部、大学部と、エスカレーター式になっている。

玄関へ入り、教室へと向かう。

「あ、おはよう！」

ハルに声をかけてきたのは親友の春野美空。
ハルの大親友でもある。

『おはよう、美空』

そして、ハルの秘密を知る一人でもある。

「相変わらず瑠璃ちゃんくるの早いね～」
『そんなこと無いよ』

空野瑠璃。

それが、彼方ハルの本名である。

彼女は有名な家柄の娘で、いろんなヤツが狙ってくる。
そのため、結婚するまでは偽名である。
本名を知っているのは、美空と、親類だけ。

教室へ入ると、クラスメイトが口々に「おはよう」と言ってくる。
そして、いつもの日常が始まる。

日常（後書き）

短い・・・・・・・・（汗

事故

瑠璃視点

放課後。
いつもどおりに美空と下校中。
新しく出来たケーキ屋さんに行く予定だ。

「あ、ここだよ」

着いたのはかわいらしい店。
うん。女の子がすきそうな店だ。

店に入り、席に案内される。

私はガトーショコラ、美空はチーズケーキだ。
美空は軽い牛乳アレルギーなのでクリームなどはあまり好んでいない。

暫くすると、頼んでいたケーキがきた。

一口食べると、さすが人気のケーキ屋、と言ったところだ。

「う～ん、おいし～」

美空も幸せそうな顔をしている。

少ししゃべってから、家に帰ることにする。

「またこようね～」
『そうだね』
と、ここまでは良かった。
別に余所見をしていたわけでもないし、油断していたわけでもない。

突っ込んできたのだ。

トラックが。

歩道の、

私と美空のところに。

キキキ――――――――！！！

「きゃあああああ！！！」

最後に聞いたのは、

誰かの叫び声。

真っ白

目が覚めると、そこは何も無い真っ白な空間だった。
なんか二次元でありそうだなこの展開。

（目が覚めたか。）

わぉ、いきなり声したし、

『誰？もしくは何？』
（まあそんな警戒するな）

いやいやいや、いきなり変なとこ来て更に知らないやつが目の前に現れたら誰だって警戒するだろ。

（俺は神、魁人だ。）

カイト・・・・・・・・・・。

（ん、どうした？）
『精神科へどうぞ。』
（！？）

この人って・・・・・・・・・イタイ人だね。

（俺頭おかしくないぞ！！失礼な）
『だって自分のこと神とか言ってるやつ絶対頭おかしいって』

あれ、なんか俯いて震えてるし、泣かしちゃった？
（ふ、ふんまあいいか。実は瑠璃に知らせがあるのだ）
『なに？』
（お前、車に轢かれたろ。）
『うん。それで？』
（実はな、俺は暇で暇で死ぬほど暇だったので瑠璃の願いを叶えてやろうと思ってな）
『え、マジで！！？お願い、お願いします！！！』

やったね、このチャンスを逃す手はない！！
（で、何を願いたいんだ？）
『それはもちろん、リボーンの世界にトリップ！！でお願い！』
（ああ、まあ、出来なくも無い。ただし、）
『なに？』
（原作総無視だけど。）
『あ、それは全然大丈夫。原作無視のほうがおもしろいから。』
（・・・・・・・・そうか。じゃあ、始めるぞ。）
『は～い』

魁人はなにやらぶつぶつと言っている。
呪文的な？
（よし、じゃあ目を閉じろ、っと、その前に）
『？』
（これを持っておけ。）

そうやって渡されたのはネックレス。
チェーンに通してあったのは

『これ、ボンゴレのエンブレムじゃん。』
（そうだ、いざというときのお守りだ）
『ふ～ん、まあなにはともあれ有難う』
（じゃあ、目を閉じろ）
『は～い』

目を閉じるといきなりの浮遊感。
落ちる、と思ったときには足はしっかり地面についており、
恐る恐る目を開けた。

『わぉ。』

私が居たのは商店街。
そしてその商店街の入り口のアーチには、

――――並盛町商店街へようこそ――――

真っ白（後書き）

やっとリボーンの世界へトリップした〜！

フェミニストですがなにか？（前書き）

今回からサブタイトルが主人公の視点に。

フェミニストですがなにか？

うわあ、来ちゃったよ。

並盛町。

嬉しいのかよくわからんのだけれど。

つーか折角来たのになんですが。
キャラに遭いたくない！！

なんでかっつーとね、まあ、遭いたいっちゃ会いたいのだけど、
あまり関わりたくない・・・・・・・・。

不思議系狙ってるから！！

・・・・・・・・・・・・・・。

イタイ人だね。
私も十分に。

けど、キャラ側から見て自分が謎多き人物ってなんか良くない！？
自分が重要人物になったみたいで！

よし、そんなことはさて置き、
探検しよう！！
この町を！

数十分後。

えっと、だいぶ時間が過ぎましたけれど、
なんか、路地裏のほうからあまりよろしくない雰囲気が漂っている
のですが。

・・・・・・・・・・・・・・

どうすればいい！

そうして私は、好奇心に負けて覗いてしまった。
そう、”しまった”
なんかメイドさんてきな人と金髪碧眼のご婦人が不良に
金巻き上げられてるんですけどー！！？

そして、

見つかった。

不良に。

「お、こんなところにまたちょうどいいカモがいるぜ。」

四、五人の不良は私を見て気色悪い笑いを浮かべる。

「おい、立てよ！」

そのうち一人がメイドさんの腕をつかんで持ち上げる。

「や、やめ・・・・・・イタっ」

プチ。

私の中で何かが切れた。

ドゴぉっ！！！

「「「！！？」」」

私は近くに落ちていた鉄パイプを、
メイドさんを掴んでいたやつに投げた。

パイプは見事ヒット！！（顔面）

気分ソーカイ！！

「お、おい、なんだよあいつ。」
「やべえんじゃね？」

そういって不良は逃げていった。

あんがいチキンだね。

『えっと、大丈夫ですか？』
「ええ、ありがとう。助かったわ」

そういって微笑むご婦人。

美しい！

男じゃないけど、

私って案外フェミニスト？

フェミニストですがなにか？（後書き）

なんか主人公のキャラが最初とぜんぜん違う！？

つーか何気に展開速い・・・・・・。

いざ、並盛高校！

品の良さそうなご婦人達と別れた私は魁人の用意してくれたという自宅へ。

マンションかと思ったんだけど、なんだか一軒やだぜ☆
ラッキー！

家の中は至って普通の家。
何も変わりない。

リビングには私が通う並盛高校のセーラー服。
並盛中学だと綱吉たちに遭えるんだけどな・・・・・・・・。
まあ、高校生の私が中学生名乗ってもだれも信じてくれないわけで・・・・・・・。

翌日（展開速いとか思わないで！）

始業式。
のついでにこの高校では入学式もやるらしい。
なんつー高校だ、と思ったけどまあそこは。

そんで高校二年生の私は始業式にでる。
もちろんカラコンつけてね。

――それでは、生徒会の紹介です。

生徒会の紹介ィ？

んなのあるんだ。

――まず、生徒会長

沢田綱吉。

守護者特別待遇・・・・・・・・・・せこっ！

さわだ　つなよし？

あはは、なんだか主人公と同じ名前だし。
でも綱吉は中学生だからそんなことあるはずないんだけどさ。

そうだそうだ、
ありえないありえないありえないありえな・・・・・・いい！？

絶句。

そして間。

無駄に行埋め。

だってさ、あれだぜ？

この舞台（？）にいるのが、
紛れも無く。

あの沢田綱吉だったから！！？
髪の毛はサイヤ人みたいに逆立ってるし、
なんか童顔なのも、

間違いなくあれだって！（どれ？）

そしてその後に紹介されるのは皆様おなじみボンゴレメンバーだってこと！

そして意外だったのは、つか驚いたのは
凪と骸(クローム)が別々、
つまりそれぞれ舞台の上に立ってるんだってこと。

幻覚にも見えないし・・・・・・

え、なんで一般人なのに見破る力があるかって？

はは、そんなのあるわけないじゃん（黒笑

直感だよ。超直感。

ブラッドオブボンゴレだよ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・

うん。そんな力があるといいのに。
つかあれよ。
わたし特別能力者！！とかさ。

せっかく頭のおかしい自称神様にトリップさせてもらったのに。
気の利かねえカスだな。

（カスって失礼すぎるだろ！？　ｂｙ頭おかしいカスこと神）

え、つかさ、生徒会だけ特別クラス特別待遇って、

卑怯！！！

守護者特別待遇・・・・・・・・・・せこっ！（後書き）

なんかグダグダだ・・・・・・・（泣

日常的な非日常

始業式やらなんやら色々終わって数日後。

私のクラスは２－Ａ

なんかこの学校のクラスわけって学力なんだって。
始業式の後に実力テスト（筆記テスト）やって、成績がいい人順にＡ組、Ｂ組ってなってくんだって。

そしてもちろん私はＡ組。
空野家次期当主たるもの、これくらいは出来て当然。
クラスで一番だし。

あ、ちなみにクラスはＥ組が最悪。
そして特別クラス特別待遇の生徒会様はＳ組。
Ｓランク並みって事だよな。

つーかこの学校のこんなおかしな待遇作りやがった校長＆理事長どいつだよ！

「理事長は知らないけど校長はリボーンって人だよ。」
『リボーン！？てか私声に出してたっけ！？』
「ばっちり」
『・・・・・・・・・・さいですか。』

私がいま話しているのは倉科有香（クラシナユカ）。
始業式のその日に友達になった。

「つーかリボーン校長っておもいっきり赤ん坊だよな。」

話に割り込んできたのは九条聯（クジョウレン）。
髪の毛が金髪でいかにも不良って感じの男子。

『ああそれ私も思った。』

いつもはこの三人ともう一人・・・・・・

「おう、おはよ！」

ぽん、と私の頭にてを乗せてきたのは林拓斗（ハヤシタクト）。

さわやかで山本武みたいな性格。
そして部活も野球部。
なので私のひそかな呼び方は山本二号。
少し失礼かもしれないけど。

いつもこの四人で過ごしている。
前の世界では家のこととかもあってあまり人と関わらないようにしてたけど、
この世界じゃそれも関係なく自由に生きれる。
この数日はとても楽しい。

だから、

この世界に連れてきてくれた魁人には

すこし感謝、かな？

休日

カキーン！

心地よい音と共にボールが飛ぶ。

今日は並盛(うち)高校野球部の試合。
拓斗の応援って事で有香と聯と見に来ている。

やっぱりうちの野球部は山本と拓斗が結構活躍してる。
さすがはエース。
来年はどっちが部長になるんだろう。

とか何とか考えてるうちに試合はどんどん進んでいく。

そして試合終了。

勝ったのはもちろん並盛野球部。
なんか圧勝だった。

「山本ー！」

ふいに誰かが観客席のフェンス越しに山本に叫びかける。
この試合はなんだか結構大掛かりな物で、
よくテレビでやってる野球の試合のように
観客席が高く、周りを囲むように建ってる。

「「きゃああーー！／／／／／／」」

『・・・・・・煩い。』

何故女子が叫んだのかと言うと、
さっき山本に叫びかけたのが事もあろうに、

沢田綱吉だった。

から。

そしてその周りにはハルや京子や獄寺やいっぱい居るから
もう試合の閉会式どころじゃなくなった。

拓斗も結構もてるから観客席の女子が

拓斗ー！とか叫んでる。

そして拓斗はそれをさわやか笑顔で答える。

その爽やかさ、分けて欲しいよ。

ある意味で忘れられない休日でした。

休日（後書き）

今回の話で、試合を見に来ていた生徒会メンバーですが、雲雀さんだけ何故か特別席に一人で座っておりました。

ｂｙ瑠璃

嫌な予感・・・・・・ていうか嫌なこと多くね？

野球の試合から数日。

私はイヤでイヤでしかたな～い授業をしかたな～く受けていた。

今の時間は担任である片瀬（カタセ）先生の授業＝数学

基本的に気の弱い女性だから寝ても平気。

誰が平気じゃないかって言うと・・・・・・・。

えっとね。

なんかね、

うちのクラスって、生徒会のひとつ下のランクのクラスだから、

たまにスクアーロ先生とＸＡＮＸＡＳ先生とディーノ先生が授業やりにきてくれるの。

はっきり言ってさ～

ありがた迷惑なんだよね。

スクアーロは入るなりお決まりの雄叫び？だし
ＸＡＮＸＡＳはいきなり「カス共が」だし。
それで男子は拓斗以外顔面蒼白
女子は黄色い歓声。
うちのクラスの女子はＭか？と思わず疑うくらい。

ディーノは爽やかで男女問わず人気だし。

もうイヤだ。
グレてやろうか。

するとなんか校庭が騒がしく。

「おい、瑠璃。」
『ん？』

後ろから小声で話しかけてきたのは聯。

ちなみに私と聯は一番窓側の席。

「なんか面白いことになってるぜ。」
『面白いこと？』

騒ぎはうちのクラスまで伝わり、

生徒が次々と席を立ち窓へ。

私もつられて窓を見る。

『・・・・・・・・・・・・え？』

校庭にいたのは、

いかにも不良って感じの高校生が、

４～５０人くらい集まって、

並盛（うち）高校の校庭にいた。

「あれじゃうちの風紀委員長が黙ってねーな。」

聯がつぶやいたのは言うまでも無い。

嫌な予感・・・・・・ていうか嫌なこと多くね？（後書き）

なんだか話のネタがうかばない・・・・・・・（焦

『あはは～おもしろー・・・・・・・・・・・・・い・・・・・・・』

「何故語尾が聞き取れないほど小さいんだ」

いや～だってさ・・・・・・・・

この状況見て、

面白いとか言ってる場合じゃねえよな！？

校庭にいた不良の皆様方はすでにほとんどが終わってるし、
残りは雲雀さん見て顔面蒼白だよ！？

あの後、教室にいた生徒は全員校庭へ。
私と聯だけだよ教室に今残ってるの。

まあ実際こっちのが眺めがいいんだけどさ。

うん。

恐怖。

そうこうしてる間に不良は全滅。

やっぱ将来地元に怪獣が出ても倒せそうなマフィアランキング一位は強いんだ・・・・・・・・・

改めて身震い。

『ね～聯』

「なんだ？」

『雲雀に勝負申し込んで来いよ。』

「あ、うんわかったぜ・・・・・・・ってええ！？

お前何無茶なこと言ってんだよ！？明らかに自殺行為だろそれよぉ

！！」

『聯授業嫌いって言ってたじゃん？そんなことしたらもう授業どこじゃなくなるから暇なんていってらん無いから。』

「おまえ、少しは友人大切にしようとか思わねえの！？」

『うん（即答）』

ず～ん・・・・・・・・

あ、拗ねた。

まいっか男だし☆

だんだん教室に人が戻り始めた。

なんか・・・・・・・・・・

もっと授業壊すような出来事ないかな～

喧嘩上等相手抹殺最強の不良（後書き）

だれか・・・・・私にネタをくれえええええ！！

前兆

第三者視点

「・・・・・・ふ～ん・・・」

並盛高校屋上。

そこから校庭を見ていたのは瑠璃と同年代の男子。
男子といっても、見た目はかわいらしく。
そんな男子が見ていたのは先ほどの不良による並盛襲撃事件。

「やっぱり・・・・・つよいなあ。恭くんは」

クスリと笑うその顔は、悪意と殺意に満ちていた。

「じゃ、もうすぐ会えるね

僕の可愛い瑠璃。」

男子はそう言うと、屋上から跡形も無く消えた。

キイ・・・・・・・・

暫くして、屋上のドアを開ける音。

「おかしいな・・・・・・・確かにここから気配がしたのに・・・・・・」

「十代目。もういなくなったんじゃないですか？」

「気配悟ってからだいぶ遅くなったし、仕方ないんじゃねーか？」

「・・・・・・それもそうだな。戻ろう」

沢田綱吉、獄寺隼人、山本武三名は

屋上を後にした。

双子

某月某日　並盛高校
ＡＭ　１０：３６

「今日は転校生が来るよ♪」
とか２年Ｓ組の担任である全身白色白髪野朗
もとい白蘭が変なことぬかしやがった。
つーか百蘭て十年前俺らと同い年くらいじゃねえの？
なんで十年後とかわらねえんだよ。

俺は沢田綱吉。
この学校の学校の生徒会長。
成績も運動も学校一。
ダメツナは・・・・・・・

ここだけの秘密、ダメツナは俺の双子の弟だ。
俺の前の席ですでに寝ているやつ。
まったく・・・・・・・・こいつと俺が双子だと思うと・・・・・・・・

「はあ・・・・・・・」
「どうしたの、綱吉君」
「なんでもないよ　京子ちゃん」
俺の隣の席は笹川京子ちゃん。
中学の頃はダメツナも俺も京子ちゃんのことが好きだった。
そう、”だった”過去形。

高校に入った頃からそれが憧れだと二人とも気づいた。
それから恋愛なんてしてないな・・・・・・・・
「綱吉クン聞いてる～？」
白蘭が聞いてくる。
「ああ、聞いてる聞いてる～」
おれはひらひらと適当に手を振る。

「じゃあ、入ってきて～」

その合図で入ってきたのは、少年だった。

転校生は門外顧問！？

「どーもー！芹沢融緋（セリザワユウヒ）でっす！！よろしく～♪」

うわぁ・・・・・・・・・・

なんかテンション高えの来たよ・・・・・・・・・

「テメエ、その挨拶はなんだ！十代目お二方に失礼だろ！！」

相変わらずの忠犬っぷりだな隼人・・・・・・・・

すると、今まで無言決め込んでいた骸が口を開く。

「しかし、Sクラスに来たからにはそれなりにマフィアとの関係があるのでしょう？」

「そーそー。いい勘してるね骸君。」

「・・・・・・・・・。」

いきなり名前で呼ばれて戸惑ってるな。

「ずばり、俺は門外顧問チームの精鋭なのだっ！！」

「「！？」」

どうだ！みたいな顔してるのがムカつくけど・・・・・・・・。
門外顧問チームって、親父やバジルとおなじか・・・・・・・・

「ん〜〜・・・・・・・・なんの騒ぎ？」

あ、ダメツナが起きた。

「あれ・・・・・・だれ？」

転校生だよバカヤロウ。

「ツナ君。あの人転校生なんだって」
「そ、そうなんだ・・・・（またなんか変なのキター！！）」
「門外顧問のヤツらしーぜ。」

俺が言うと、

「え、バジルと父さんと同じとこの！？」

またマフィア関係だー！！とかいって頭抱えてるけど
マフィア関係しかこのクラス来ねえし。

「ま、将来門外顧問のボスになるのはバジルだろうけど・・・・・・・・・

それにしても・・・・・・・・・・」

芹沢は近寄ってきて俺とダメツナを見比べる。

・・・・・・・・・・・・・なんだよ

「やっぱ親方の言うとおり似てるな、ツナと綱吉。」

「・・・・・・・・・・まあ、一卵性だからな」

名前は二人とも綱吉だけど、

紛らわしいから俺は綱吉でダメツナはツナで分けている。

ちなみに俺らが双子だって知ってるのは

このクラスの人間とボンゴレに関わってる人たちだけ。

普段は俺が生徒会長やってるけど、たまにダメツナが代わる。

十代目も二人。
Xグローブも二つ
ボンゴレリングも二つ

俺らは二人でひとつ。

「ま、そーゆー訳だからこれからよろしくな♪」

芹沢が無邪気に笑う。

不思議とその笑顔が心地よかった。

同時刻

2年A組

ざわ・・・・・・・・っ

え～っと・・・・・・・・・・・・・

なにがどうしてこうなった！？

第一回、オリキャラ人気投票！

では、勝手に始めてしまった第一回オリキャラ人気投票。

いきましょー！

まず、この人気投票は「歌姫の奇跡」に出てくる春宮がつくったオリキャラに投票して頂くみたいな感じです！

投票対象

空野瑠璃（ソラノルリ）　現実世界の気分屋フェミニスト！

倉科有香（クラシナユカ）　瑠璃の身を誰よりも案じる心優しき親友

九条聯（クジョウレン）　瑠璃の良き相談相手＆ストッパー

林拓斗（ハヤシタクト）　野球部の爽やかエース！

魁人（カイト）（神）　頭おかしいカスことポジティブ青年！

芹沢融緋（セリザワユウヒ）　いつでもテンションＭＡＸ！門外顧問チーム

の精鋭！

対象キャラは上記の通り！

投票方法は感想のところから投票いただけると幸いです。

感想欄に投票するキャラとそのキャラの好きなところを書いて投票ください。

私も簡単に始めたので皆様どうぞ気軽に投票ください！

投票受付期間は無期限です！

第一回、オリキャラ人気投票！（後書き）

この企画をしたのは、実はちょっとしたスランプ状態で・・・・・・・

なるべく早めに次話投稿したいと思います！

変態

「え、うそ～っ」
「マジかよ、あれ」
「そうだったんだ～」

悲痛な声を上げる女子
驚きの呟きを漏らす男子
好奇の目で冷やかす女子

その視線の先は、

私。

・・・・・・・・・

あのさ～・・・・・・・・・

誰か助けて！！

こんにちは&お久しぶり皆様
前回　前々回登場しなかった空野瑠璃です

って、そんなことどーでもいいんだよ！
この状況！どう考えてもおかしい！！

なんか今の私は転校生で初対面のはずの
鷹崎理緒（タカサキリオ）って奴の膝の上に座ってる、
否、座らされてる。

なんで初対面の男にこんなことされなきゃならないんだ〜？
私こいつと会ったことないぞ！？

ていうか、女子ってこういう展開好きそうだよね〜
でも私は、

男が嫌いだ！

だからこーゆー展開も嫌いだ！！

『離せよコラ。狭いし暑い。』
「あ～瑠璃っていい匂い～」
『話を聞け変態』

そういって頬を擦り付けてくる鷹崎もとい変態。

『あのさ、ここ私の席なんだけど。そしてお前が座って私がお前の膝の上に
座ってるってどう考えてもおかしいよなぁ？』

「俺は気にしないよ？」
『死ね』

つか、なんでそもそもこういうことになったんだっけ・・・・・・・・？

回想

～回想～

２年Ａ組
ＡＭ　１０：３７

「えっと・・・・・今日は転校生がきますよ～・・・・・・・」

頼りないこの人は２年Ａ組（うち）の担任の片瀬緑（カタセミドリ）先生。
はっきり言うと、何でこの人教師になれたんだろう。
常に挙動不審なのに。

「じゃ、じゃあ、入ってきてください・・・・」

ガラガラっ

わぁっ・・・・・・

女子の黄色い歓声。

入ってきたのは、美形と言う種類の男子。

こうゆう顔って女子にモテそうだな～って顔。
つーか私の周りって美形多くない？

有香は結構可愛いし、聯もそれなりにモテるし、
拓斗も実際もてるし・・・・・・・・・
魁人もけっこう美形だし・・・・・・・・・

私だけ不細工で、おちこむなぁ・・・・・・・・・

（実は瑠璃が一番美人ｗ　ｂｙ春宮）

「鷹崎理緒です、よろしく」

きゃあー／／／／

女子が頬を染める。

あの男にそれほどの魅力があるとは思えん・・・・・・

「ほぅ・・・・・・・・／／／／」
『・・・・・・・・え？』

見ると、片瀬先生もわずかに頬を染めていた。

『お前もか！！』

つか先生が生徒に恋って・・・・・・・・・

「なあなあ瑠璃」
『ん？』

話しかけてきたのは拓斗。
私の隣の席は拓斗。
そして私の後ろ、
つまり聯の隣が有香。

こうも見事に四人そろってるって奇跡だよね～

すると、拓斗が真剣な表情になる。

「あいつ・・・・・・・」
『・・・・・・・・・？』

「野球部に入っかな？」

がくぅっ！！

『そっちかい！！』

珍しく真剣だから何かと思ったら・・・・・・・・
野球かよ！

「ごめんごめん、今のは半分冗談で・・・・・・・」
『半分本気なのか』
「あいつ・・・・・・・変だと思わねえ？」
『どのへんが？』
「なんつーか、オーラっていうのかな・・・・・・・」
『それただの変態じゃん。』

「空野さん。」
『はいっ！？』

やべ、いきなり話しかけるから声裏返ったじゃん。

見ると、鷹崎・・・・・・だっけ、私の席の目の前に居た。

そして・・・・・・・・

――――チュ。

きゃあっ／／／／

『・・・・・・・・え？』

女子がこっち見て騒いでる。

なに、何があったの？

しかも、さっき頬に暖かい感触が・・・・・・・

それが、目の前に居る変態からのキスだと気づくのは、
時間がたってからだった。

有香、拓斗、聯はめちゃくちゃ驚いた顔してる。

多分今の私は、
間抜け面してる．．．．．．．．．．

『．．．．．．．．．．な、なにすんだあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！』

それから私の叫び声でクラス中が驚いたのはいうまでもない

～回想終了～

不安

あの転校生事件から数日後の休日。
私は久々に一人で散歩を楽しんでいた。
『ん～っ！久々に静かって最高～』
私はそのまま朝早い商店街を歩いていた。
商店街はまだ開いてない店が多く、
あいてるのはコンビニとかそんくらいだった。
私はそのまま家に帰ろうとした。
『！！』
コンビニからでてきた人影を見て私は反射的に
隠れる。
って、なにやってんの私！？

これじゃ悪いことしてるみたいじゃん！！

おそるおそる影から出てきた人影を覗く。

あれ、あれって・・・・・・・

沢田綱吉じゃん。

けど・・・・・・・

なんか始業式のときにステージの上に立ってた綱吉とは
違う気がする。

なんか、始業式のときは何でも出来るってかんじの雰囲気だったけど、
今はなんつーか・・・・・・・

ダメツナ！ってかんじがするなあ・・・・・
いや、ダメツナのほうが綱吉らしいんだけど。

そんな雰囲気変えられるほど綱吉って演技
上手じゃないはず・・・・・・・・。

なんともいえない複雑な感情が私の中に生まれる。

『・・・・・・・・家帰ろう』

そのまま、私は綱吉に見つからないように
走って帰った。

胸のうちに、

どうしようもないわずかな不安を抱えながら。

誘拐

凪(クローム)side

「クロームちゃん、帰ろう！」
「今日は新しく出来たケーキ屋さんに行きませんか？」

学校が終わると、いつも一緒に帰るのは笹川京子ちゃんと三浦ハルちゃん。
二人とも私にすごく優しくしてくれて、
友達だって言ってくれた。

「・・・・・・うん。」

いつもこうやって帰ってると、なんだか私の世界が変わったような気がする。

骸様には、感謝してもしきれないくらい。

三人で、ケーキ屋に向かう。
他愛の無い話をしながら、笑って、

キキィ――――！！！

「・・・・・・・え？」

いきなり、車がこっちに向かってきた。

なに？

なんで、こっちに・・・・・・

「クロームちゃん！危ない！」

京子ちゃんとハルちゃんが私をかばおうと飛び出してくる。

でも、間に合わない。

轢かれる・・・・・・・・！

私は目を硬く閉じた。

フワっ・・・・・・・・・・

「えっ・・・・・・・・・」

いきなりの浮遊感。

そのまま、誰かに抱きしめられたまま、地面を転がる。

車は、ぎりぎりのところで止まった。

『いっ・・・・・・っつ〜!!』

「あ、あの・・・・・・」

私を助けてくれた人は、長い黒髪に、黒い瞳。
すごく美人の人だった。

『あ、大丈夫!?怪我してない!?』
「・・・・・・大丈夫・・・」
私が答えると、その人はほっとしたように顔を綻ばせる。

『よかった・・・・怪我してなくて・・・』
「あ、有難う・・・・・」

「「クロームちゃん!!」」

京子ちゃんとハルちゃんが駆け寄ってくる。

「よかった、クロームちゃんが無事で。」
「ほんとよかったです!!」
「うん、ありがとう・・・・・・」

すると、京子ちゃんが気づいて、

「あれ、あなた・・・並盛高校の人ですか?」
『へ?あ、ああ・・・・そうだよ』
「じゃあ、ハルたちとおなじですね!」
「・・・・あ・・・・」

ほんとだ．．．．．．制服がうちの高校と同じだ．．．

バン！！

『「「！！？」」』

いきなりの音。

皆が振り向くと、さっき私達を轢こうとした車から、
数人のスーツ姿の男が出てきた。

『なんなんだ、あんたら．．．．．』
「一緒に来てもらおう。」

助けてくれた人が私をかばうように立つ。

『この女の子に用があるのかな？』
「．．．．そうだ。」

私を．．．．誘拐？

『なら、尚更わたせねー・・・・・・・な！！』

どごっ！！

女の子がスーツのひとに蹴りを入れる。

それから、女の子はスーツの人たち相手に次々と向かっていく。

「つ、強いです・・・・・・・！」

「すごい・・・・・・・」

すると、スーツの人のうちの一人が、女の子を後ろから羽交い絞めにする。

『ちィッ・・・・・・・・離せよ！！！』

もがいても、相手は男の人で、動けない。

「おい、こいつどーする？」

「ついでに攫っちまえよ。」

「そうだな」

『ッ・・・・・・・』

女の子は、無痛注射器で眠らされてしまった。

「じゃあ、お譲ちゃんもな」
「きゃっ・・・・・・・」

そのまま、私と女の子は、車に乗せられどこかへと連れて行かれた・・・・・・

ボス・・・・・・・・

凪(クローム)side end

「クロームちゃんに、あの女の子が・・・・・・」
「京子ちゃん！ツナさんたちに知らせましょう！」
「うん。そうだね！」

笹川京子、三浦ハル両名は、
沢田宅へと向かった・・・・・・・

予感

綱吉ｓｉｄｅ

なんだかその日は嫌な予感がした。
超直感、かな。

俺が部屋でボーっとしてると。

「綱吉〜？入るよボフぅっ！？」
「勝手にはいんなダメツナが」

俺は思いっきり弟のツナの顔にクッションを投げつけてやった。

礼儀知らずなヤツだな。

「い、いきなりクッション投げなくてもいいだろ〜」

涙目になりながら訴えるツナ。

「うるせえ。で、どうしたんだ。なんか用があったんだろ？」

「あ、そうそう！」

ツナは思い出したようにいう。
って、忘れてたのかよ。

「なんかさ、嫌な予感がして・・・・・・」
「お前もか。俺もだ」
「やっぱり・・・・・」

俺達の中に流れるボンゴレの血が語りかける。
これから起こる危険を。

ピンポーン

軽快なチャイムの音が響く。

「あれ、お客？ちょっと出てくるね」

そういってダメツナが降りていく。

「あれ、京子ちゃんにハル・・・・どうしたの！？」

ツナの声が響く。
なんだなんだ？
おれも階段を下りて玄関へ向かう
「あ、綱吉君！！」
必死な顔京子ちゃんが叫ぶ。
「どうしたんだ二人とも、そんなに息を切らして」
「それは・・・・・」
「お願いしますツナさん、綱吉さん！」
「「クロームちゃんたちを、助けて！！」」

予感（後書き）

だんだんシリアス入ってきたな・・・・・・

再会

凪（クローム）side

久しぶりに、昔の夢を見た。

誰にも必要とされていない昔の私。

だけど、骸様と出会って、私の人生全て変わった。

私を仲間と呼んでくれる人がいて、

私を友達と呼んでくれる人がいて、

私の居場所が出来た気がした。

けど、

あの子が・・・・・・・

私を・・・・・・・・・

――――起きて。

え？

――――起きて。

誰？

『・・・・・ん、クロームさん！！』

「・・・・・・・・・・っ」

目を開けると、さっき私を助けてくれた女の子が
私を心配そうに覗き込んでいた。

『あ、よかった、目を覚まして・・・・・』
ほっとえがおになる。
「あの、さっきはありがとう・・・・」
『ううん。気にしないで』

見回すと、どこかの部屋。

薄暗いから解らないけど、ここ、来たことがあるような・・・・？

「あ、あの、名前教えて・・・・・？」
『私？空野瑠璃だよ。よろしくね』
「よ、よろしく・・・・・・。瑠璃ちゃんは、1年生？」

『・・・え？』

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・違うの？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一応、2年生なんだけど・・・・』

え、私と同じ歳・・・！？

ど、どう考えても私より年下に見えるのに・・・・・・・

『「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・」』

痛い＆思い沈黙。

どうしよう・・・・・・・・・

キィ・・・・・・・・

『「！？」』

とっさに身構える私と瑠璃ちゃん。

槍はいつでも持ち歩いてるから・・・・・・・

「はろ～ん♪ご機嫌いかがかしら？」

入ってきたのは私と同じ歳の女の子。

私は、その女の子に見覚えがあった。

「久しぶり～ん、クロームちゃん♪」

このやけにぶりっ子なしゃべり方と、外見。

どう見ても・・・・・・・・

『なんでお前がここにいる！？』

「・・・・・・え？」

瑠璃ちゃんがすごく驚いている。

瑠璃ちゃんの、知り合い？

「や～ん、どこかで見たことあると思ったら瑠璃ちゃんじゃな～い」

『なんでお前がこ・こ・に・い・る？』

すごく苛立った風に瑠璃ちゃんがといかける。

「なんでって、私もここに来たかったのよ。

ず～っと前からね♪」

あいつ・・・・・やっぱ狂ってる

瑠璃視点

なんで、
なんでなんでなんでなんで！
なんで私の目の前に、こいつがいるんだ！？
だって、こいつは・・・・・・・
「まりあちゃん・・・・・・」

私の隣で私と同じく捕まった凪（クローム）がつぶやいた。

そうだ。
こいつの名前は東遷（トウセン）まりあ。
私の、

？私の前の世界での親友？

そうだ。

なんで、
なんでこの世界にいるの？

「くすくす・・・・・・・瑠璃ちゃん、なんで？って顔してる～♪」

そりゃするさ。

「それは後で教えてあげるから～、とりあえず・・・・・」

まりあは後ろにいたスーツの男に合図する。

すると、男は複数で、私を他のところへと連れて行こうとする。

『ちょ・・・・・・なにするの！？』

やべ、今のいいかた妙に乙女っぽかったな。

「瑠璃ちゃん！」
『クロームさん・・・・・・・』
「うるさいわねえ・・・・・・」

まりあはクロームを見て鬱陶しそうに顔をしかめる。
おいコラ。可愛いクロームに何言ってんだ。

そしてどこか違う部屋。

『なんで、おまえがこの世界にいるんだよ？おまえ、一年前行方不明になったときから
この世界にいたのか？』
「う～ん、まあそうなるわねん♪」

こいつ、いちいち言い方が癇に障るな。

『その一年間の間、いったい何を・・・・・』

私が訪ねかけた時だった。

「ボス。」
「あら、早かったのね。」
『・・・・・・・・・!!?』

驚愕。

まりあの時よりも比べ物にならないくらい。

『ゆ、有香・・・・・・・?』
「・・・・・瑠璃ちゃん・・・・・」

そこにいたのが、
今の私の親友。倉科有香(クラシナユカ)。

「ああ有香はね、私の、
このｆａｒｆａｌｌａ　ｆａｍｉｒｉａの雨の守護者。
私のファミリーなの♪」

『・・・・・・・・・・・・ファルファッラ、ファミリー？』

ファルファッラって・・・・・・・イタリア語で、蝶って意味・・・・・・・・

『どういう、こと・・・・・・・・？』

「・・・・・こういう事だよ。瑠璃ちゃん」

いつも、私はそうしてきたもの

まりあside

――1年前からあの人と私の邪魔をする人間は消してきた。

今までも、そしてこれからも。

私(わたくし)はあの人を守る為ならなんだってする。

そう、

「1年前のあの日、ボンゴレを裏切ったのと同じように」

――

ツナside

とりあえずあの後、守護者を全員

綱吉の部屋に集めた。

「私達・・・・クロームちゃんとケーキ屋に行こうと思って、道を歩いてたの。そしたら・・・・・・いきなり車が突っ込んできて・・・・」

「そこでクロームちゃんが轢かれそうになったのを、女の子が助けてくれたんです！」

「女の子？」

綱吉が疑問の声を上げる。

「はい。黒い髪で、すっごく美人さんでした！」

「それで、スーツの男の人たちに連れて行かれちゃって・・・・・」

黒いスーツ・・・・・ってことは、

「マフィアっすね・・・・・」

「そうだね、獄寺くん・・・・」

けど、なんでクロームを？

すると、骸が口を開く。

「クロームを人質にとり、ボンゴレ１０代目をおびき寄せる・・・」

「まわりくどいことしやがって・・・・・」
オレと綱吉を、おびき寄せる・・・・・・・
「よし、クロームを助けにくぞ。」
「どこまでもお供します１０代目！」
「そうこなくっちゃな！」
「・・・・ふん、風紀を乱すなら咬み殺す」
「クフフ・・・僕のクロームを弄んだ罪、重いですよ」
「極限に救出だー！！」
皆気合はいってるなあ・・・・・・
「おら何してんだ、ダメツナも行くぞ」
「あ、うん！！」
綱吉にせかされて、オレも部屋を出る。
「おい、ダメツナ」
「あ、り、リボーン！」
いつのまに、オレの目の前にはリボーンが立っていた。
「綱吉も聞け」

「なんだよ」

「クロームを連れ去った犯人がわかった」
「ホントっすかリボーンさん！」
「ああ。ただ、そのファミリーがな・・・・」

ん、リボーンが黙るなんて珍しいな。

「そのファミリーが・・・・・・・・
ファルファッラファミリーなんだ」

「！！？」

恋人

「もう・・・・あの事から一年も経ったのね」

とある部屋で、ソファに身をうずめた少女、
まりあがつぶやく。

「あの頃は、私も未熟だったわね。少しでも楽しいと思ってしまうなんて」

まりあが思い出すのは、1年前。
一人の少女の存在が招いた不幸の話。

「やっぱり・・・・・あの子を守るには、あいつらを消さなくてはいけないわ」

まりあはソファから立ち上がると、
ある部屋に向かう。

キイ・・・・・

『!?』

部屋にいたのは、鎖でつながれた、

全ての始まり。

「瑠璃ちゃん、ご機嫌いかがかしら？」

『まりあ・・・・・！』

1年前。

まりあには、恋人がいた。

とても仲のよい公認のカップル。

どんなときも二人で乗り越えてきた。

二人は愛し合っていた。

しかし、まりあはその相手が嫌いだった。

むしろ憎んですらいた。

自分の大切な人を守る為に、

彼女は常に嘘を吐き続ける。

「大好きだよ・・・・・・・綱吉」

――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――

瑠璃ｓｉｄｅ

クロームと離れ離れの部屋に移された私は、
何故か鎖で繋がれていた。

てか、この鎖壊れない・・・・・・。

どうにかもがいてたら、私をココに入れろと指示を出した
ファルファッラファミリーのボス
東遷(トウセン)まりあが入ってきた。

「瑠璃ちゃん、ご機嫌いかがかしら？」
『まりあ・・・・・！』

こうなったらまりあを脅してでもクロームを助けに行かないと――――

そう思った時。
まりあが一瞬悲しそうな顔をした。

しかし、次の瞬間には、私が見たことの無い笑みを浮べていた。

『・・・・・・っ！？』

怖い。

それが、私の思ったこと。

「瑠璃ちゃん・・・・・・私はね、私の大切な人を守る為に

ボンゴレをつぶすことにしたの」

『な！？何考えてっ・・・・・・』

「だから、瑠璃ちゃんとクロームちゃんには、ボンゴレをおびき出す餌になってもらうわ」

突撃と救出と

京子ｓｉｄｅ

ツナ君たちの家を出た私達は、
リボーン君が調べてくれた場所へ向かうことにした。
リボーン君、まだ赤ちゃんなのにすごいなあ・・・・。
それにしても、クロームちゃん無事かな・・・・・・。
不安だけが胸中に広がる。

「ねえ、京子ちゃん」
「ツナ君？」

振り向くと、なにか言い辛そうに目をそらしながら話しかけてきたツナ君がいた。

「どうか、したの？」
「あのさ、京子ちゃんとハルは・・・・・・
オレの家で、待っててくれないかな？」

え？

「ど、どうして・・・・・？」

もしかして、私が足手まといだから・・・・・・。

そう落ち込みかけたとき、

「相手は、マフィアで・・・・・、下手したら、京子ちゃんたちに怪我させちゃうかもしれないって・・・・・・、怖いんだ」

「ツナ君・・・・・」

私達を、心配してくれたんだ。

「ありがとうツナ君。でも、私も行く」

「ハルも行きます！」

「京子ちゃん、ハル・・・・・」

「私達も、なにか力になりたいの」

私とハルちゃんがツナ君にお願いする。

「ま、いーんじゃねーの。本人達が行きたいっつってんなら」

「つ、綱吉・・・・」

ツナ君は戸惑いながらも、

「じゃあ、二人とも、無理はしないでね」

了承してくれた。

「うん！」
「はい！」

そして私達は、クロームちゃんを助ける為に進んだ。

ハルｓｉｄｅ

歩き出してから数分。

ハルたちは歩きながら作戦会議をしてました。

とても緊張します・・・・・・！

「とりあえず、ツナと綱吉はクロームを救出。雲雀は・・・・」
「群れてる奴を咬み殺すだけだよ」
「・・・・・・ま、いいか」

けれど、先ほどから綱吉さんの様子がおかしいです・・・・・。
なんか、黙ってばかりで、どうしたんでしょう。

「つ、ツナさん」
「ん、なに？ハル」
「綱吉さんはどうしたんですか？」
「え？あ、ああ・・・・・・まあ、いろいろあるんだよ・・・・」
「そうなんですか・・・・・」

いろいろ・・・・・・
もしかして、クロームちゃんを攫った人たちと
なにかあったんでしょうか・・・・？

ハルが再びツナさんに問いかけようとしたとき、

「クロームちゃん！」
「え？」

京子ちゃんがある方向を指して叫びました。

ハルたちもその方向を向くと、

「クローム！」
「極限に無事だったか！」

「無事でよかったのな～」

クロームちゃんが、駆けてくるのがハルの目に映りました。

「ボス・・・・・みんな・・・・・・！」

けれど、なぜかクロームちゃんは必死な顔をしてたんです。

「もしかして、追っ手か？」

獄寺さんが問いかけると、クロームちゃんはふるふると首を横に振りました。

そして、ゆっくり、ちいさな声で言ったんです。

「瑠璃ちゃんに・・・・・黒髪の女の子に、殺されかけて・・・・・・必死で逃げてきたの」

「殺され・・・・・かけた？」

黒髪の女の子って・・・・・

さっき交通事故からクロームちゃんを救った人、でしょうか・・・・・

「なんでそんな人が、殺そうとするのでしょうか・・・・・」

『ねえ、クローム』

不意に、鈴のようなよく通る声が響く。

ハルは、この声に聞き覚えが・・・・・・・？

みんなで一斉に振り向くと、

そこには、やっぱりさっきの女の子で・・・・・

『クロームが逃げちゃったら、クロームを殺せないでしょう？』

無邪気な妖しいえがおで、

そう言い放ちました。

その後

脆弱に包まれた部屋。
その部屋は、とても豪華なもので、
その部屋の中心にいる女性が高い身分の人間だと一目でわかる。

『もう、あの事から４年かあ・・・・・』

２０代あたりの女性は、しみじみと言う。

４年前のクローム髑髏、空野瑠璃誘拐事件は、誰にとっても
意外な形で終わった・・・・・と、思いたい。

結局、その後ボンゴレとファルファッラ、瑠璃がどうなったのかと
言うと―――

４年前にさかのぼる。

４年前。

『クローム、どうして逃げちゃうのかな？』
「・・・・・・・・っ」

クロームは恐怖に身を縮こまらせる。
瑠璃は相変わらず無邪気な笑顔のまま。

「君、いったい何者かな？」
『・・・・・私？』

瑠璃が、綱吉のほうを見る。

『私は、瑠璃、空野瑠璃以外の何者でもないよ？』
「そうじゃなくて！」

今度はツナが叫ぶ。

「君は、どこかのマフィアなの！？」
『マフィア？そんなもんじゃないよ』

瑠璃はさらに目を細め、楽しそうに言い放つ。

『私はね・・・・・・!?』

驚きに目を見開く。
なぜか、それは・・・・・・

『てめえ、ふざけんな!!!』

廃工場の入り口から叫ぶ、

瑠璃がいた。

「な・・・・・二人!?」
「どういうことですか!?」

そのまま起こった様子の瑠璃は、驚きの表情のまま固まった瑠璃の元へ
歩いていき・・・・・・

パアン！！

「「「！！？」」」

思いっきり、平手打ちをした。

どういうこと・・・・？

乾いた音が響き、あたりは静まり返る。

綱吉たちの目の前では、

瑠璃が瑠璃を殴るという、なんとも異様な光景が広がっていた。

『な、なにして・・・・！？』

殴られたほうは驚愕の面持ちでもう一人の瑠璃を見た。

が、更に驚愕に目を見開く。

ポロポロ・・・

「え、ちょ、どうしたの！？」

ツナが心配そうに殴ったほうの瑠璃に近寄る。

そう、瑠璃の瞳からは、大粒の涙がこぼれおちていたのだ。

『わ、わたしっ・・・は・・・・・こんな、こと・・・・』

周りはますます訳がわからない。

「そうか。」
「え？」
綱吉が未だに呆然と立ち尽くしているほうの瑠璃をみる。
「お前、幻覚か」
『っ・・・・・』
ぎくり、と肩を震わせるが、観念したように俯くと、
体が霧に包まれる。
そこに現れたのは、綱吉がかつて誰よりも好きだった相手。
東遷（トウセン）まりあだった。

「・・・・・・瑠璃ちゃん」
『う・・・・・・ひっく・・・・・・』
ツナに支えられながら、しゃくりあげ泣いている瑠璃を、
つらそうな目で見る。

『ごめん・・・・わかってるの、まりあが・・・・・・悪くないこと
くらい・・・・』
「そんな・・・・・」
『いいの・・・・・悪いのは・・・・・・・

全部、私だもんね』

「そんなことないわ！瑠璃ちゃんはなにも悪くない！」
『ううん。けど、私がいなければ、まりあもずっと幸せだったもの』
「違う、私は瑠璃ちゃんを守りたくて！」

《もーそのくらいにしたらぁ？》

急に頭の中に響く声。

『な・・・・・・なに・・・・・？』

瑠璃はツナの服のすそを強く掴む。

《あんたらのお友達ごっこ見てんのはっきりいって疲れたんだけど》

「誰？」

クロームが身構えながら問う。

《オレ？オレは》

――――――――芹沢融緋だよ？

まさかの！？

『芹沢・・・・・融・・・・・緋・・・・！？』

一同に驚愕の波紋が広がる。

「芹沢って・・・・ユウヒ君！？」

ツナが叫びにも似た声を上げる。

ほかの面々も、それぞれ驚愕の面持ちで事構えていた。

「そーそ。オレは芹沢融緋（セリザワユウヒ）♪」

何処からともなく現れた少年。

「何で君がここにいるの？」

雲雀がトンファーを構え、今にも咬み殺しそうな殺気をだしている。

「あれ・・・・誰？」

融緋のことを知らないまりあは、訳がわからないというように首をかしげる。

彼は先日、イタリアからSクラスに転入してきた門外顧問チーム、晴属性の精鋭。
当初は無邪気な笑顔を顔にたたえていたが、今はどこか含みのある笑顔。

「ん・・・・・瑠璃、さん？」

ツナは、いまだ自分の袖を掴んだまま融緋を凝視している瑠璃を心配そうに覗き込む。

すると、瑠璃はツナの元を離れ、ゆっくり歩き出す。

「え、ちょ・・・・」

融緋は笑顔のまま。

『・・・・・ひ・・・・・・・・』

瑠璃が口を開きかける。

『久しぶりいいいいいいいいいっ！！』

「えぇぇぇぇぇぇぇ！！？」

いきなり駆け出した瑠璃に、
一同驚きの一声。

『久しぶりだね、融緋！！小学生以来じゃないかな！？』
「うん。そうだね」

他の人間を無視したあまり意味の解らない再会。
いつもは騒がしい融緋も、今のはしゃいでる瑠璃と一緒に見ると、
何倍も大人びて見える。

「る・・・・・・瑠璃ちゃん・・・・・・その人、誰？」

まりあがやっとの思いで声を上げると、何故か手を握り合っている
瑠璃と融緋は、満面の笑みでサラッと、

「『え？幼なじみだけど？』」

まさかの！？（後書き）

ひさびさの更新！！

てっててて～ん♪

とりあえず一段落。

「で、二人は幼なじみなの？」

ツナの遠慮がちな問いに、瑠璃は未だ笑みを浮べたままで答える。

『そ。小学校の頃、私がイタリアから日本に留学したときに一番最初に仲良くなったのが融緋なの。』

「じゃあ、まりあちゃんとはいつ知り合ったの？」

「それは、中学に入ったときですわ」

途中からまりあが口を挟む。

「あのときの瑠璃ちゃんの輝きは、もう言葉に表せないほどでした！瑠璃ちゃんの笑顔はまさに女神のごとく！」

「ああ～わかる、瑠璃って笑顔が可愛いもんな！」

なんだか変な話で盛り上がる融緋とまりあ。

他一同は若干引き気味。

「ってか、そこの女・・・・瑠璃だっけ？イタリアから来たってい

うけど、
あんたもマフィア？」
綱吉が疑いのまなざしで瑠璃を見つめる。
『へ？いや、マフィアじゃないけど・・・・なんつーかさ、あれだよね』
「？」
『事の経緯をそろそろ話したほうがいいかなぁ、なんて』
瑠璃はちらりとまりあと融緋を見る。
すると、いままで盛り上がってた二人が、急に神妙な面持ちになる。

「・・・・事の、経緯？」
「どういうことなんでしょう？」
「何か事情があるのかな？」

いままで黙っていた女子三人組が声を上げる。
『えっとね、実は私達三人、この世界の人間じゃないんだ。』
「「「「！！！」」」」
瑠璃は語りだす。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6537u/

歌姫の奇跡

2011年11月20日19時31分発行